

第4学年 国語科学習指導案

1 単元名 学習した「読み方」を生かして 「ごんぎつね」

2 本単元の目標

- いたずらからつぐないへと変化し、自分の存在を認めてもらおうとして兵十に近づいていくごんの気持ちの動きを通して、語り手の伝えようとしたごんのさびしさを読み取ることができる。
- 登場人物の気持ちの変化について叙述をもとに想像豊かに読むために、「繰り返しを読む」「文末を読む」「似た言葉と比べて読む」「場面と場面をつないで読む」読み方を使ったり、人物の関係をとらえるために「呼称の変化を読む」読み方に気付いたりすることができる。
- 「ごんぎつね」で学習した読み方を生かして新美南吉の他の作品を読み、「読書発表会」に向けて取り組むことができる。

3 学習指導の考え方

- 本学年の子どもたちは、これまでの学習を通して、登場人物の行動や会話として書かれていることばを関連付けて読むと、人物の気持ちや人柄をとらえることができ、自分の考えやものの見方を広げることができる経験をしてきている。このことを通して子どもたちは、自分の考えの根拠となる叙述を取り上げ、ことばをつないだり比べたりする読み方をしながら、人物の気持ちを読み取ったり、友達との相違点を見つけようとしたりすることはできている。しかし、場面と場面を比べたり、場面と場面をつないだりして、人物の気持ちの変化や人物像をどうとらえたかという自分なりの読みをつくることや、友達との読みの違いを考えることはまだ十分とはいえない。
- 本教材「ごんぎつね」は、ひとりぼっちの小ぎつねごんが、兵十に自分の存在を気付いてほしい、心を通い合わせたいと願い続ける、その一途な姿を「ごんのひとりぼっちのさびしさ」として描いている物語である。本教材は、6つの場面から構成されていて、冒頭で村の茂平さんから聞いた話として、語り手が登場し、この語り手の心に残ったものは何なのかと考えながら読み進めていくことができるようになっている。1～5の場面では、ごんの姿（行動・心内語）を中心に描かれていて、最後の6の場面では兵十の言動を中心にごんの行動のみが描かれている。ごんの行動を表している繰り返しの表現や、ごんの気持ちを表す心内語・文末の表現を読む読み方を使ったり、それまでの「ぬすつとぎつねめ」「ごんぎつねめ」から「ごん、おまい・・・」という兵十のごんに対する呼称の変化をとらえる読み方を知ったりすることで、場面と場面をつなぎながらごんの思いや行動を想像豊かに読み取り、一途なごんの姿からごんのさびしさを読み確かめ、自分の考えを広げるのに適した教材であると考えられる。

これらの「読み方」を生かして、新美南吉の他の作品を読むことで、さらに自分の考えを広げることができる期待できる。

- 指導にあたっては、まず、題名から疑問や予想を出し、冒頭の一文への語り手の登場に着目することで、「語り手はこのごんぎつねの話を通して私たちに何を伝えたかったのだろうか」という読み通しの目を生み出す。

予見から学習計画の段階では、「ごんぎつね」という話の中で、子どもたち自身の心に残ったことは何なのか、それが語り手の伝えたかったものではないかととらえ、一人一人自分の予見をまとめていくようにする。それぞれの関係性について話し合う中で、あいまいな点や出てきた中心となる叙述のずれや重なり、読み確かめていく際に使えそうな「読み方」を明らかにしながら、共通する「ごんのさびしさ」の視点で読み確かめていく計画を立てる。

読み確かめの段階では、予見の話し合いの際に明らかになった中心となる叙述を中心文として位置付け、既習の「読み方」を使ったり新たな「読み方」に気付いたりしながら、各場面でのごんの言動から気持ちの変化を読み取り、「ごんのさびしさ」の中身を読み確かめていくようにする。

読みのまとめ・読み方のまとめの段階では、題名・冒頭に戻って、ごんのひとりぼっちのさびしさについて、語り手の伝えたかったことをまとめる。発展としては、これまで学習した「読み方」を生かして新美南吉の他の作品を読み、作者の「伝えたかったことは何なのか」という視点で「ごんぎつね」との比較をしながら読書紹介を行い、自分の見方・考え方を広げることができるようにする。

4 学習指導計画（全24時間）

次時	主な学習活動	指導上の留意点	学習する読み方
一 読み通しの目	<p>1 題名と冒頭の読みをつないで、読み通しの目を生み出すことを確かめる。</p> <p>(1) 「ごんぎつね」という題名から、考えたことを出し合う。</p> <p>(2) 題名と冒頭の一文から読み通しの目をつくる。</p> <p>読み通しの目</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">語り手は「ごんぎつね」のお話を通して、わたしたちに何を伝えたかったのだろう。</div>	<p>○ 既習経験から「ごんぎつね」という題名のはたらきについて考え、冒頭へとつなぐようにする。</p> <p>○ 語り手が小さい頃に聞いた話なのに大人になってもまだ覚えてるのは、「ごんぎつね」の何が心に残っていて、何を伝えたかったからなのかについて話し合い、読み通しの目につなぐようにする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">題名を読む</div>
二 予見 (○組本時)	<p>2 1 全文を通読し、場面のまとまりやあらすじを考える。</p> <p>2 読み通しの目に対する予見を書きまとめる。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>1 1 予見について話し合う。</p> <p>2 クラスの予見として整理する。予想される予見</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">語り手は、わたしたちに ごんの やさしさ・うれしさ・かなしさ を伝えたかったのではないか。 それは、「ごんのさびしさ」を読んでいくと分かる。</div>	<p>○ 挿絵や一行空きを手がかりに、場面のまとまりをとらえることができるようにする。</p> <p>○ 各場面でのごんの言動に目を向け、読み手である自分たちの心に何が残ったかを考えることで、語り手が伝えたかったことについて書きまとめるようにする。</p> <p>○ どの叙述からどう読み取ったのか、根拠をはっきりさせ板書に位置付けることで、友達の考えとの相違点をはっきりさせる。</p> <p>○ 根拠とした叙述・読み取りの違いから、読み確かめる箇所を確認し、学習計画へとつなぐようにする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">場面と場面をつないで読む 人物・時・場所を読む</div>
三 学習計画	<p>1 1 どの場面のどの叙述を中心にし何を確認するのか、読み確かめていく計画を立てる。</p>	<p>○ 予見の違いから、根拠となる叙述の重なりや違いを整理し、どこからどのように確かめるのかははっきりさせる。</p> <p>○ 予見の話し合いの際に出された「読み方」も学習計画に位置付け、どの読み方を使うと読み確かめられるのか見通しをもつことができるようにする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">言葉や文を読む 中心となる</div>

四 読 み 確 か め	2	<p>1 いたずらばかりするごんの姿から、ごんのさびしさについて読み確かめる。</p> <p>(1) 書き込みをする。</p> <p>(2) ごんのさびしさについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「～たり～たり」 ・「ほり散らす」「ほる」 	<p>○ ごんの言動が書かれている部分に線を引き、そこから読み取ったごんの「さびしさ」について書き込みをする。</p> <p>○ 繰り返しや似た言葉と比べて読むことでいたずらをするごんのさびしさを読み取ることができるようにする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">似た言葉と比べて読む</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-top: 10px;">言葉をはずして読む</div>
	<p>ごんは、ひとりぼっちだったので、わざと村人や兵十が困るようないたずらをたくさんして、みんなにかまってほしいさびしさがあった。</p>			
	2	<p>1 兵十のおっかあの死と自分のいたずらを結びつけて後悔しているごんのさびしさを読み確かめる。</p> <p>(1) 書き込みをする。</p> <p>(2) ごんのさびしさについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ちがいない。」「だろう。」 	<p>○ ごんの言動が書かれている部分に線を引き、そこから読み取ったごんの「さびしさ」について書き込みをする。</p> <p>○ 文末表現や繰り返しからごんの思いこんでいる様子や後悔している気持ちを読み取ることができるようにする。</p>	
<p>ごんは、自分のいたずらのせいで、兵十のおっかあを死なせてしまったと思ひこみ、悲しくなった。あなの中で自分のいたずらを後悔して、一人さびしくなった。</p>				
2	<p>1 何日も続けてつぐないをして兵十に報いたいと願うごんのさびしさを読み確かめる。</p> <p>(1) 書き込みをする。</p> <p>(2) ごんのさびしさについて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おれと同じ」 ・「か。」 ・「次の日」「その次の日」 	<p>○ ごんの言動が書かれている部分に線を引き、そこから読み取ったごんの「さびしさ」について書き込みをする。</p> <p>○ はずして読む読み方や繰り返し、文末表現から兵十の姿に自分のさびしさを重ね、一生懸命つぐないをしているごんの気持ちを読み取ることができるようにする。</p> <p>○ つぐないをしようとしたことが、兵十をきずつけることになったという点からごんの悲しさをとらえている子どもに、兵十との関係でごんの気持ちを考えさせることでそのさびしさに気付くことができるようにする。</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">文末表現を読む</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-top: 10px;">繰り返し読む</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-top: 10px;">場面をつないで読む</div>	
<p>ごんは、自分と同じさびしさをもつ兵十だと思った。うなぎのつぐないのつもりでぬすんだいわしを投げ入れたが、かえって兵十をきずつけることになりさらに悲しくなり、さびしさはもっと深くなった。</p>				

<p>2 (○ 組 本 時 2 / 2)</p>	<p>1 自分のつぐないに気付いてもらえないことを知ったごんのさびしさを読み確かめる。 (1) 書き込みをする。 (2) ごんのさびしさについて話し合う。 ・「ついて・つけて・ふみふみ」 ・「おれが・おれには・おれは」 ・「なあ」</p>	<p>○ ごんの言動が書かれている部分に線を引き、そこから読み取ったごんの「さびしさ」について書き込みをする。 ○ 似た言葉や繰り返し、文末表現から、つぐないをしているのは自分だと兵十に気付いてもらえないごんのさびしさを読み取ることができるようにする。</p>	<p>繰り返しを読む 場面をつないで読む 指示語を読む 文末表現を読む</p>
<p>ごんは、兵十に自分がくりや松たけを持っていっていることに気付いてほしいと期待していたのに気付いてもらえず、がっかりして、そのさびしさはよりいっそう深くなった。</p>			
<p>2</p>	<p>1 ぐったりと、目をつぶったままうなずいたごんのさびしさを読み確かめる。 (1) 書き込みをする。 (2) ごんのさびしさについて話し合う。 ・「ごんぎつねめ」 →「ごん、おまい」 ・ごんは・・・うなずきました</p>	<p>○ ごんの言動が書かれている部分に線を引き、そこから読み取ったごんの「さびしさ」について書き込みをする。 ○ 兵十の「ごん」に対する呼び方の変化を読んだり、それに対するごんの反応を読んだりすることで、死をもってしか分かり合えなかったごんのさびしさを読み取ることができるようにする。</p>	<p>呼び方の変化を読む 場面をつないで読む</p>
<p>ごんは、兵十にうたれてしまったが、そのことによって、つぐないをしているのが自分だと分かってもらいたかったさびしさはなくなった。しかし、それ以上、心を通い合わせることができないさびしさは残った。</p>			
<p>五 読 み の ま と め</p>	<p>3 1 題名と冒頭に戻って、ごんのひとりぼっちのさびしさをまとめる。 2 語り手は「ごんぎつね」の話を通して何を伝えたかったのだろうかについて、話し合いまとめる。 3 読み方のまとめをする。</p>	<p>○ 読み確かめたごんのさびしさを振り返り、さびしさがどのように変わっていったのかまとめるようにする。 ○ まとめたごんのさびしさを手がかりとして、語り手が伝えたかったことについてまとめるようにする。 ○ これまでの学習記録をもとに、学んできた読み方を振り返り、意識付けるようにする。</p>	<p>題名を読む 場面をつないで読む</p>
<p>六 発 展</p>	<p>6 1 同じ作者の本を読み、読書発表会を開く。</p>	<p>○ これまでの読み方を生かして、新美南吉の他の作品を読み、心の交流の視点で読書紹介を行う。</p>	

第4学年〇組

5 本時 (4 / 24)

6 本時の目標

- 語り手の伝えたかったことについて各自の予見を出し合うことで、根拠とした箇所・読み取りの深さによってそのとらえ方に違いがあることに気づき、ごんの言動をつないで、共通する「ひとりぼっちのごんのさびしさ」として、クラスの予見を方向付けることができる。
- 予見の話し合いを通して、叙述のどこをどのように読むと語り手の伝えたかったことが確かめられるのかについて、これまでの「読み方」を使う見通しをもつことができる。

7 本時指導の考え方

子どもたちは、前時までに、読み通しの目「語り手はこのごんぎつねの話で、私たちに何を伝えたいのか」に対する予見を書きまとめた。本時は、それらをクラスの予見として整理していく時間である。

本時指導にあたっては、まず前時までの学習を振り返ることで本時の内容を確認する。「本時の学習の進め方」を提示することで、子どもたちが本時学習の見通しをもつことができるようにする。

次に、各自が前時に書いた予見についての話し合いを行う。その際、前時の書き込みをもとに、4名程度の子どもに提案をうながす。「語り手の伝えたかったこと」のとらえ方の違いが明らかなるものを提案者として選び、なぜそう考えたのか根拠をはっきりとさせながら提案できるようにしておく。そのために、事前に提案者が根拠としてあげている叙述を板書に位置付けておき、その箇所を指し示しながら提案し、教師がそれを線や矢印で結んでいくといった、視覚的にも分かりやすい提案ができるようにする。また、この提案を聞く子どもたちには、自分の予見との相違点に注意しながら聞くことができるようにするために、提案者の考えに沿って色分けされたカードを使い、どの提案者の考えと似ているのか同じなのかと判断させるようにする。提案者の提案の後、そのカードを示しながら立場を明確にして発言するようにうながす。これらの発言を、板書に整理しながら位置付けることで、とらえ方が同じでも根拠が違うこと、根拠が同じでもとらえ方がちがうことなど、各予見のつながりをとらえやすくしていく。

板書をもとに、出された予見について「何種類に分けられるのか」「それぞれの関係はどうなっているのか」と問いかけることで、重なり・違いを明確にし、ひとりぼっちによる「ごんのさびしさ」の方向で、クラスの予見として整理していく。また、その予見の違いは、どの箇所を読むとはっきりするのか、どのような「読み方」をすると確かめられるのかについて確認することで、次時の学習（学習計画を立てる）への見通しをもつことができるようにする。

最後に、本時の学習のまとめとして、本時の振り返りを行い、各自の予見の見直しを行う。振り返りを行う際には、「初めの自分の予見」「話し合いの中で変わった・広がった・深まった・気付かされた内容」「読み方」の3点で書きまとめるようにすることで、学習前と学習後の考えの広がりや深まりを実感できるようにしていく。

8 板書例

学習した「読み方」を生かして
ごんぎつね 新美南吉

読み通しの目 語り手は、「ごんぎつね」のお話を通して、私たちに何を伝えたかったのだろうか。

めあて 一人一人の予見を出し合い、クラスの予見を整理しよう。

ひとりぼっちの小ぎつね
いたずらばかりしました。

ちよつ、あんないたずら
しなけりやよかった。

おれと同じ、ひとりぼっ
ちなぎのつぐないに
これはしまった

「かわいそうに兵十
は・・・」

次の日も、その次の日
も・・・

二人の後をつけていき
ました。

こいつはつまらないな。
おれ・おれ・
おれは引き合わないな
あ。

ぐったりと目をつぶつ
たまま、うなずきまし
た。

語り手は、私たちに、ごんの
やさしさ・うれしさ・悲しさを
伝えたかったのではないかと予見
が出た。これは、全部に共通している「ご
んのさびしさ」を読んでいくと分かる。

気づいてもらえない
気分は気づいてくれるかな
つぐないをしたつもりだったの
兵十に気づいてもらいたい。

兵十にかまっけてほしい
その結果、後悔

わかってもらえたうれしさ

つぐないを続けるやさしさ

死んでいく悲しさ

ごんのさびしさ

第4学年〇組

5 本時 (13 / 24)

6 本時の目標

- 兵十と加助の会話を聞いて、自分のつぐないに気付いてもらえないことを知ったごんのさびしい気持ちを読み確かめることができる。
- ごんの気持ちの変化を叙述に即して想像豊かに読むために、「繰り返し」や「文末表現」、「似た言葉と比べる読む」読み方を使ったり、「前の場面とつないで読む」読み方を身に付けたりすることができる。

7 本時指導の考え方

子どもたちは、前時に、ごんの気持ちについて中心となる言葉や文に書き込みをしている。本時は、その書き込みをもとに話し合いをし、兵十に自分がつぐないをしていることに気付いてもらえていないことを知ったごんのさびしい気持ちを読み確かめる学習である。

本時指導にあたっては、ごんの気持ちを確認するために、子ども達がどの文や言葉に着目し、根拠として取り上げているかを事前の書き込みをもとに把握し、友達の意見につなげて発言できるように指名の工夫をしていく。そこで、まず、中心文の「引き合わないなあ」に視点を当て、何が引き合わないのか、「なあ」の文末表現からごんのどんな気持ち分かるのかを話し合う。

次に、「おれ・・・おれ・・・おれ」の繰り返しの言葉に着目し、前の場面の「次の日も、その次の日も」とつないで読んでいる子ども達の意見を取り上げ、兵十の「うん」と言う返答で、「こいつはつまらないな」「引き合わないなあ」へとつながり、がっかりしたごんの気持ちをとらえていくことができるようにする。さらに、中心文以外の「つけて」「ついて」「ふみふみ」の三つの似た言葉を比べて読んでいる子の意見を取り上げ、影絵を操作しながら、自分だと気付いてほしいという期待感で思わず近づいていっているごんの気持ちを読み取ることができるようにする。ごんの気持ちのまとめでは、自分だと気付いてほしい期待が兵十の返答で一気に落胆の気持ちに変化したことを矢印で追いながら視覚的に分かるようにする。

最後に、話し合いの内容と前時までの確かめとをつなぎながら本時の読み確かめをし、予見の確かめとしてまとめる。そして、本時学習を初めの自分の考え・使った「読み方」・話し合いを通して分かった考えや深まった考えの3点で振り返り、一人一人の読みの深まりを子ども自身が実感できるようにする。

8 板書例

挿絵

二人の話を・・・
お念仏が・・・
二人の話を・・・

4 二人のあとをつづいていきました。
5 お念仏が・・・

かげぼうしをふみふみ行きました。

「えっ。」
「そうかなあ。」
「神様にお礼を・・・」
「うん。」

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

影絵

「えっ。」
「そうかなあ。」
「神様にお礼を・・・」
「うん。」

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

前の場面とつないで

「引き合わないなあ。」と思ったごんの気持ちを
読み取り、予見をたしかめよう。

「前の場面とつないで」
くりや松たけを
気づかれないように
続きを聞きたい

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

まとめ

ごんは、兵十に自分がくりや松たけを持っていつていることに気付いてほしいと期待していたのに気付いてもらえず、がっかりして、そのさびしさはいっそう深くなった。

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

兵十はなんでわかってくれないんだ
おれがやっているのに

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

振り返り

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

「おれは、一へえ、こいつはつまらないな。」
「おれがくりや松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

学習した「読み方」を生かして
ごんぎつね
新美南吉

9 本時の展開

時	学習活動と内容	指導上の留意点
3 2 5 1 5 2	<p>1 本時のめあてを確かめる。 「引き合わないなあ。」と思ったごんの気持ちを読み取り, 予見をたしかめよう。</p> <p>2 中心文をもとに, ごんの気持ちを話し合う。 (1 「引き合わないなあ」と思ったごんの気持ちを話し合う。 ・「<u>引き合わないなあ</u>」 ・<u>おれ</u>が・・・, <u>おれ</u>には・・・, <u>おれ</u>は 次の日も, その次の日も くりや松たけを ・<u>つけて</u>・・・, <u>ついて</u>・・・, <u>ふみふみ</u>・・・</p> <p>(2) 「引き合わないなあ」と思ったごんの気持ちをまとめる。</p> <p>3 本時のまとめをする。 (1) ごんのさびしさについて考える。 (2) 本時のまとめをする。 3) 本時で使った「読み方」を確認し, 「 日の学習で」を書く。 ・ 繰り返しを読む ・ 文末を読む ・ 似た言葉を読む ・ 前の場面とつないで読む</p> <p>4 次時の学習の見通しをもつ。</p>	<p>○ 前時までの流れと予見を で想し, 本時学習のめあてを確認できるようにする。</p> <p>○ 前時の書き込みをもとに, 根拠となる言葉とそのわけを 確にしながら話し合う。 ○ ごんの「引き合わないなあ」の言葉につながる根拠として「引き合わないなあ」の「なあ」の文末表現に着目して考える子, 「おれ」の繰り返しに着目し, くりや松たけを持っていったのは自分だと気付いてほしい気持ちだと前の場面とつないで考える子, ごんの行動「つけて」, 「ついて」「ふみふみ」の似た言葉を比べながら, ごんの期待する気持ちとつないで考える子と大きく3つから話し合う。 ○ 「つけて」「ついて」「ふみふみ」は, 影絵を操作しながら 感をつかむことができるようにし, もっと近くで聞きたいというごんの気持ちにせまるようにする。</p> <p>○ 気付いてほしい「期待」の気持ちと気付いてくれなかった「落胆」の気持ち, 「引き合わないなあ」の言葉につながったことを視覚的に分かるように心 の変化を矢印で表す。</p> <p>○ みんなで考えたごんの気持ちと前の場面の予見の確かめをつないで, ごんのさびしさがどうなったかを考えることができるようにする。</p> <p>○ 表 に, 板書を手がかりにしながら, 本時学習で学んだ「読み方」を使って分かったことを発表させることで, 全 での確認をする。</p> <p>○ 「はじめの自分の考え」や「友達の読み方のよさ」「話し合いを通して分かった考えや深まった考え」を入れて振り返りを書くように助言し, 話し合いを通して自分の考えが深まったことを実感できるようにする。</p> <p>○ ごんのさびしさは, この後どうなるかの予見を確かめることを げ, 見通しがもてるようにする。</p>